

第 I 部

最先端の研究者が迫る 労働組合の問題点と可能性

「理解・共感・参加を推進する労働組合の未来」に関する研究会報告のうち、最初にお届けするのは、労使関係論、労働経済学、政治思想史、社会運動論などの分野で、現在、日本の学界をリードする研究者による、歯に衣着せぬ率直な労働組合に関する論考である。4名の研究者とともに長年、労働組合について深い関心を持ち、今後の動向について懸念と期待を抱いてきた人々ばかりだ。

研究会での考察や調査を通じ、労働組合の未来のためには、組合員範囲の変更や地域オルガナイザーの育成支援、「ファンダム」をもたらす地域コミュニティとしての再構築、現状の「無関心（わからない）」を敢えて「期待と批判」に変えるだけの発信力の強化、組合組織の合理化・透明化のさらなる追求が必要であることなどが、ここでは指摘されている。

これらの主張や提案を、すぐさま実践に取り入れられる労働組合は、未だ少数ではあるだろう。しかしながら、それぞれの状況に応じて、納得できる指摘に対して、できることから取り入れていく創意・工夫の開始こそが、労働組合の未来のためには欠かせない。

研究者のなかには、労働組合が社会や個人に対して果たし得る可能性について期待する声も多い。その具体的な声として、労働組合関係者に目をむけてほしいと願う。

文責 玄田 有史（研究会座長）

- 1章 組織拡大の現状と課題
- 2章 労働組合と民主主義の未来 ー地域とファンダムの可能性ー
- 3章 批判されるより怖いこと 「勤労者短観調査」の20年の比較
- 4章 労働組合は変わったほうがいい？だとすれば、どこをどうやって？